



當作靖彦監修、李在鎬編

ICT × 日本語教育

情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践

ひつじ書房、2019 年発行、304p.

ISBN : 978-4-89476-944-1

李 在鎬

1. 本書の特徴

本書は、情報通信技術を意味する ICT (Information and Communication Technology) と日本語教育をかけ合わせ、日本語教育学における ICT 利用のさらなる活性化をはかる目的で編まれたものである。本書の特徴は、以下の 3 点である。

1. 理論的視点、教育実践的視点、研究開発的視点を柱に 19 本の論文が収録されている。
2. ICT と日本語教育分野を牽引する 47 名の研究者が執筆した論文集である。
3. 学会参加者と執筆者同士の相互交流によって研究の質向上を実現した論文集である。

以下では、上記の 3 点について書籍を編集した立場から述べる。

まず、1 つ目の特徴として、研究編、実践編、理論編の 3 部構成であることが挙げられる。各セクションに対して、編者から執筆者には以下のような趣旨説明を行った。

- ・【研究編】：先行研究を踏まえた上で、新しい知見が盛り込まれているもの。または、実験的な要素が強いもの。挑戦的な性格が強いもの。(15 ページを目安に執筆すること)
- ・【実践編】：既存のツールや教材を使った教育実践、授業実践。新しい知見よりは、教師仲間と共有したい授業実践を紹介するもの。(10 ページを目安に執筆すること)
- ・【ツールおよびコンテンツ編】：研究編と実践編の中間的な存在。ソフトウェアやシステムの開発、さらには教材開発を行った研究を紹介してもらいます。(13 ページを目安に執筆すること)

それぞれのセクションによって盛り込むべき項目についても、次のような執筆方針を示し、論文集としての統一感をもたせるように工夫した。まず、【研究編】では、「研究背景

と本研究の位置づけ」という見出しを必ず用意し、1) 研究テーマの理論的背景もしくは研究史について触れること、2) 理論的背景や研究史の中で、自身の研究がどう位置づけられるのかについての議論を盛り込むことを必須にした。次に、【実践編】では、1) 「実践の概要」という見出しをたて「誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうやって」実践を行ったのかについて述べること、2) 論文の最後は「実践を振り返ってみて」という見出しで実践を行った結果、何がわかったのかについて述べることを必須にした。最後に、【ツールおよびコンテンツ編】では、1) 論文の冒頭に「開発ストーリー」を示すこと、2) 書籍として広範囲に流通することに配慮し、「公開ポリシー」を明記することを必須にした。こうした調整のおかげで、全体として統一感のある書籍になっている。

次に、2 つ目の特徴として、参加者の多様性が挙げられる。本書にはいわゆる大学で研究や教育をする研究者のみならず、国際交流基金のような行政法人で業務として日本語教育のコンテンツを作っている方、民間企業で研究する研究員の方、さらには、システムエンジニアとしての実務を担当している方など、多種多様な方が参加している。また、地域においても、日本で研究教育をされている方のほかに、北米やヨーロッパの大学教員、アジアでの教育実践者が参加し、オンリーワンの研究や実践を紹介している。こうした執筆者の多様なフィールドは、論文集のカバー範囲を自ずと拡張させ、ICT と日本語教育の今後の広がりを感じさせる仕上がりになったと考えている。

最後に、3 つ目の特徴として、この論文集の編集プロセスに関して述べておきたい。本書の着想は 2017 年 7 月で、出版社に企画書を提案したのは、同年 8 月で、出版社への入稿は同年の 12 月であった。47 名の執筆者による 19 本の論文という規模から考えると、企画から入稿までの期間は、非常に短かったと言える。こうした短時間での作業が実現できた背景として、本書は、2017 年 8 月に開催された国際会議「CASTEL/J 2017」(CASTEL/J は、「日本語教育支援システム研究会」(Computer Assisted Systems For Teaching & Learning Japanese) の略称) で発表されたものの中から、覆面査読者と学会参加者の投票から論文を選んだということが関係している。私としては、いわゆる学会発表後のプロシーディングスという位置づけにはしたくないということもあり、研究の質を担保する必要があると考えた。そのため、3 つの方法で論文集としてクオリティ向上に努めた。1 つ目は、著者にやってもらう作業として、編者が作成した 14 項目のチェックリストを配布し、表記の統一や文献の示し方、図表の形式について自己点検するようにした。2 つ目は、著者同士が覆面でお互いの原稿を読み、コメントをし、修正をするという作業を行った。これは、47 名の多種多様な研究者が参加してくれたおかげで実現した方法である。3 つ目は、メーリングリストを活用し、スケジュールのリマインドと進捗状況を共有したこと、Google ドキュメントなどのクラウドサービスを活用し、正確かつ迅速な情報共有をはかりながら編集作業を進めたことが挙げられる。こうした努力のおかげで良い論文集ができたと考えている。このことは Amazon.com の読者レビューからも確認できる。

(り じえほ 早稲田大学大学院日本語教育研究科)